

2017 3/14

No.2038

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



バレーボールのやまゆり杯・小田急旗争奪第41回県家庭婦人大会の決勝は、前回優勝で推薦出場の羽鳥（藤沢）が大越（藤沢2位）を2-0で下し、3年連続11度目の頂点に立った。



contents

視点・点描 3

「住工混在」対策に期待

講演録 4

働き方改革～変える覚悟、変わる覚悟

サイボウズ代表取締役社長 青野 慶久

国際 8

「世界はどこに向かうのか」

自信喪失に陥った強大な国

色あせたオバマ時代の「希望」

文化 12

「好機到来、と彼は言った

「帰ってきたヒトラー」監督に聞く

企業最前線 14

駐車場でもシェアビジネス

個人、企業の遊休資産を活用

くらし2017 16

年金額改定ルールの見直し

広告珍談 18

広告はたのしい③⑤

日本初の不動産広告

NNAアジア経済レポート 19

事務局だより

◇4月定例講演会

2017年4月12日(水)

午後1時30分～3時

崎陽軒本店5階「マンダリン」

講師は早稲田大学大学院客員
教授の春名幹男氏

演題は「トランプ米政権でどう
なる世界と日本」

視点 点描



「住工混在」対策に期待

準工業地域などの工場跡地に住宅が建設され、周辺の工場の操業に支障が出ている問題で、川崎市は2017年度から対策に乗り出し、工場の防音・防振工事や跡地への工場誘致などの助成を始める。都市部の「住工混在」問題は、同市だけの問題ではないだけに、注目される。

「いいは『準工業地域』です」「当

社では、昭和63年よりこの地で金属の板金加工を行っています。地域の共存共栄を考慮されご理解、ご了承頂きますよう」。中原区宮内の真新しい2階建ての戸建て住宅群を取り囲むように並ぶ中小製造工場の塀や壁に貼り出されている看板だ。

住宅群は、金属加工工場（敷地面積およそ1千平方メートル）の跡地に

建った。近くには、最近話題の「ご遺体ホテル」ができ、住民とのあつれきが起きているだけに、神経質になり、こうした看板が設けられたという。

『住みたい街』として人気の武蔵小杉は地価が上がった。そこにバスで行ける宮内周辺は、住宅地としての人気が上がっている」と市担当者。それを証明するように、周辺には戸建て住宅やマンションが新築されている。

高津区久地・宇奈根でも事情は同じ。「会社を移転して6年になるが、周囲に数十軒の住宅が建ち、朝のラジオ体操がうるさいとクレームが来た。今は音を出さないで体操をしている」と中小製造業者。「納期を守るため夜間に残業を行うこともある。それができないと注文が来なくなるからだ。ただ、クレームを気にして夜間の作業も遠慮がちになる」との声も聞

かれる。

こうした地域の工業団体は、住民の理解を図ろうと、地域を対象にした工場見学会や夏祭りも開催。「しかし、マンションなどは入れ替えが早く、追いつかない」と嘆く。そこで市は、東京都の特別区や東大阪市で行っていると同様の支援策を立案し、17年度予算案に関係費4793万円を計上した。

人口減少時代にあつて毎年1万人ずつ人口が増え、ことし150万人都市になろうとしている川崎。しかし、急激な人口増加は、必ずしもいいことばかりではない。新たなひずみや課題も生まれている。「住工混在」はその一つ。工都を支えてきた技術力のある中小製造業の灯を消さぬよう、市は努力を続けてほしい。

（神奈川新聞社川崎総局長

滝村 誠）

日本初の不動産広告

阪急宝塚線の池田は、呉羽里くれはのさとという。

呉服町に呉服橋、呉服幼稚園に呉服小学校があり、呉服をクレハと読む。市章は井ゲタに糸巻が組み込まれたデザイン。はるかなむかし、呉くれという国から渡米したふ

たりの織り姫が、水を汲み上げた井戸と、織物に使った糸巻を表しているという。

織り姫は「呉服」と「漢織」。クレハドリと、アヤハトリという美しい名であった。町に沿って流れる猪名川に、ふたりが上陸した唐船からふねがふちヶ淵。糸を染める水を汲んだ「染殿井」。機織りの工房跡は「星御門」、織り上がった絹をかけた「絹掛松」などもある。

彼女たちは100歳あまりまで機織りや裁縫を教え、ここに没し

た。葬った塚が姫室と梅室。伊居いけ太神社にはクリハドリが、呉服くれは社にはアヤハトリが祀られているという。

こないいい伝えをもつ池田に、小林一三は日本で初めて住宅地を開発。建売住宅の販売もおこなったのは、1909（明治42）年のこと。

図は宅地販売のパンフレット「住宅地御案内」の表紙。大きな文字で、「如何なる土地を選ぶべきか」「如何なる家屋に住むべきか」とある。重なるように阪急の路線図があり、右端から野江、梅

田、箕面公園、池田、中山観音、宝塚温泉、有馬、西宮と読める。

17（大正6）年、小林は「家賃ほどで家屋敷が買へる」と題して「住宅問題で、つねに苦勞される方は、当会社が、山紫明媚なる土地を選んで経営せる、別荘風住宅が、大阪市内の借家賃同様で買取られることを御存じなき方々のこととなるべし」

「当会社では沿道における、景勝の地所に、敷地を50〜60坪より、300坪くらいまで、広狭種々に区

画して、家屋も15〜16坪より40〜

50坪までいろいろいと、間取りも工面を凝らし、タタミ、建具、湯殿、カマド、流しはもちろん、前栽には樹木、庭石まで造り上げ、夜具と鍋、カマだけ持つて行けば、そのまま住はれるようにしてある」

「家、屋敷を現金にて売ることには申すまでもなく、お家賃くらの月賦、なしくずし払ひで、売るのである」と。

そのころ掲出した阪急電車の広告に、「振動なくして乗心地よし」「美麗をもつて賞賛を得たり」「米国最新式日本唯一なり」「80人乗りのボギー式なり」と、電車を賛美して

「きれいで、早うて、ガラアキの電車」と、逆手にとって広告をかかげた。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）（図）日本最初の住宅販売のパンフレット。1909（明治42）年、阪急電鉄

